2020.5.25
No.218

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間1,500円）

あるがままの生活をしています。

カタクリとエゾエンゴサク
今年はコロナ禍で出歩けないため、昨年の撮影：2019年4月29日

全国的にコロナ感染が落ち着いてきましたが、北海道はクラスターが、思いのほか広がりました。ある特養施設では80人以上の感染と10人以上の方が亡くなりました。医療防護具やマスクが十分でないなかで、最前線で奮闘されている医療従事者には感謝の気持ちでいっぱいです。

私はもう1カ月半、札幌には出ていません。さまざまな集会も全て中止になり、映画館も閉館で不急ではないけれど心に穴が空きました。でも、近くの森林公園の散歩を楽しんで自然から力をもらっています。自粛ではなく、ありのままに暮らしています。

コロナ禍で、多くの市民は不安と生活基盤を揺るがすような事態に、生きていけるのかと苦しんでいます。そのさなかに、安倍政権は、長い時間をかけてつくり上げてきた社会の形を逆戻りさせるかのように、検察庁法改正案を国会で成立させようとしました。今は、コロナ禍で困っている人たちの救済、ひっ迫する医療体制への支援が最優先ではありませんか。まるで火事場泥棒です。私もネットで反対の署名をしました。インターネット上でハッシュタグがついた「#検察庁法改正案に抗議します」のツイッター投稿で700万もの投稿で著名人や俳優や歌手などが声をあげました。私はツィッターはしませんが、どんなことが書かれているのか新聞のサイトから入り読みました。一番最初に出てきたのは小泉今日子さん「検察OBの意見書を読んだ日は泣きました。そして背筋が伸びました」。井浦新さん「保身のために都合よく、法律も政治もねじ曲げないで下さい。この国を壊さないでください」。宮本亜門さん「このコロナ禍の混乱の中集中すべきは人の命。どうみても民主主義とはかけ離れた法案を強引に決めることは日本にとって悲劇です」。ツィッターデモ、素晴らしいですね。安倍政権は、特定の検察幹部の定年を内閣の意向で特例的に延長することを可能にする検察庁法改正案の今国会での採決を断念しました。安保法制、共謀罪、モリカケ問題での公文書の改ざん、隠蔽など、民主主義を守らない安倍政権に、怒りの声が殺到したのです。圧倒的な世論の反対に勇気づけられました。私も勇気を出して声を上げたいと思います。

防衛省の辺野古設計変更申請を許さない！意見広告に私も協力しています。コロナ禍で広告紙面作りが今はできないというはがきを受け取りました。数日前には沖縄の友人から地元新聞が送られてきました。政府は大浦湾の軟弱地盤改良のために設計変更を沖縄県に申請したという記事です。総経費が9300億円というから驚きです。米軍の使用開始までにかかる12年のうち、埋め立て工事には9年かかるそうです。玉城デニー知事は、「対話に応じず、県民に十分な説明をしないまま、工事の手続きを進めるのは断じて容認できない」と批判しました。（4月22日琉球新報）

作家の目取真俊さんは「もはや辺野古新基地建設に無駄な金を使うのは終わりにしなければならない。（略）新型コロナウイルス対策と医療や介護現場への支援、各種産業や市民生活の保護と立て直し、失業対策、学ぶ機会が奪われている子どもたちへの支援、学生への授業料減免、奨学金の拡大、就職支援などに回すべきだ」と述べています。（5月15日沖縄タイムス）

庭に昨年植えたばかりのヤエザクラが咲きました。撮影：５月１８日

岑 Books

掘り起こされた史実は今と地続きだった

沖縄　「戦争マラリア」
強制疎開死3600人の真相に迫る

大矢英代著　あけび書房　1760円

ドキュメンタリー映画「沖縄スパイ戦史」は三上智恵さんと大矢英代さんの共同作品です。217号で三上さんの労書「証言　沖縄スパイ戦史」を、今号は大矢英代さんの著書を紹介します。

大矢さんは2009年八重山毎日新聞社でインターシップをしたときに「戦争マラリア」を記事で知りました。

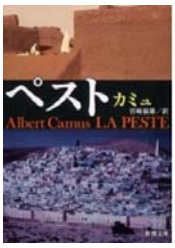
地上戦がなかった八重山諸島。中でも波照間は戦争マラリアで最も深刻な被害を受けた島で、「今、聞かなくては」と取材をはじめました。大矢さんは、波照間に住み込んで戦争マラリアに向き合います。2010年には大学に休学届を出して浦中浩おじいと孝子おばあの家に住みこみ、サトウキビ畑で農作業を手伝い、波照間の言葉を習い、島唄を一緒に歌い島民の心を開いていきます。本書は沖縄戦の最深部に迫ったルポルタージュです。

明らかになったのは、軍命による強制移住でした。「マラリア有病地」と恐れられていた西表島に移住させられ、波照間は島民の3人に一人が死亡したのです。その任務を遂行したのが、陸軍中野学校の山下（偽名）でした。最初は島の教師として潜入し、住民の心をつかみます。その後の変貌に凍り付きました。

孝子おばあがマラリアで亡くなった家族の話をようやく話してくれたのは同居して5カ月後でした。6人の兄弟、祖父母、両親の10人を亡くしたのです。父の死に際に受け取った10円玉を握りしめて親戚中を回って埋葬を頼むのですが、断られたという新聞記事の話を聞きだそうとしても答えません。ぽつんと、「わたし、シラミも取ったんだよ。死んだ家族の」とおばあが語る場面。大矢さんは「13歳の少女が、床の間で息絶えた家族の遺体を埋葬することも放置することもできないまま、次々とわいてくるシラミを取る姿を想像した。生き残った小さな妹と二人だけで。想像すると、心が締め付けられた」大矢さんの温かい人柄が伝わってきました。取材は、時には心の痛みにも触れなくてはならない。そのときの決意を日記に「私が伝えたいのは、国家によって奪われたそれらの命だ。多くの人たちが忘れてしまっている今だからこそ」と書きます。学生時代から取材した人は44人。大矢さんが心通わせた分、話す人々の息づかいや表情が浮かんでくるようでした。浦中家を去る時、浩おじいは「ハナヨ、学んだ者として、伝える義務があるよ」に励まされます。

戦争マラリアでなくなった人は3600人。米軍や自衛隊の既存の基地に加えて、辺野古や高江の新基地建設。今、また南西諸島での自衛隊のミサイル基地が進められています。基地。核戦略の専門家であるピーター・カズニック教授に取材し、沖縄の米軍について聞きました。「米軍の任務は、沖縄を守ることでも、日本を守ることでもありません。それどころか、沖縄と日本をより危険な立場にしています。敵にとって、沖縄は動かない、いつでも攻撃可能な、イージーな標的なのです」。戦争マラリアを生き抜いた八重山のおじいおばあたちは「また戦争をするんかやぁ」と口々に語るのです。大矢さんは同じ過ちをくり返そうとしている今、歴史から学ばなければならないと訴えます。沖縄の問題を我がこととして考えなくてはと思いました。

住民と一緒に苦しみ、泣いた大矢さんの瑞々しい感性と誠実さが伝わってきます。大矢さんの成長にも共感しました。



感染症の試練をどう生きる

ペスト　カミュ著
宮崎嶺雄訳　新潮文庫　825円

新型コロナウイルスの感染拡大で読んだのが本書です。

私たちが何を大事にして行動しなければならないのか、どんな声を上げていかなければならないのかを教えてくれます。「ペスト」と闘う唯一の方法は誠実さだ」と主人公のリウーは語りました。

舞台は、突如ペストの猛威にさらされた北アフリカの港湾都市オラン市。街に押し寄せるペストの蔓延で、次々と人々が命を失っていきます。その一方でオラン市は感染拡大阻止のため外界から完全に遮断。医師リウーは、友人のタルーらとともにこの極限状況に立ち向かっていくが、あらゆる試みは挫折し、ペストの災禍は拡大の一途をたどる。後手に回り続ける行政の対応、厳しい状況から目をそらし現実逃避を続ける人々、増え続ける死者。今、起きているコロナウィルスのパンデミックとそっくりな光景が描かれます。医師リウーやその友人たちの姿を通して、極限状況下における人間の尊厳とは何かを考えていきます。現実逃避を始める市民に対して神父パヌルーは「ペストは神の審判のしるし」と訴え人々に回心を迫る。その一方で、保健隊を結成し脱出を断念し、彼らと連帯する新聞記者ランベール。彼らを支えたのは、決して大げさなものではなく、ささやかな仕事への愛であり、人と人とをつなぐ連帯の感情であり、自分の職務を果たすことへの誠実さでした。ペストの終息を「暗い港から、祝賀の最初の花火が上がった。全市は、長いかすかな歓喜をもってそれにこたえた。（略）そして失った男たち、女たちも、すべて死んだ者も罪を犯した者も忘れられていた。人々は相変わらず同じようだった」。今、体験していることと重ね心に残りました。「おそらくはいつか、人間に不幸と教訓をもたらすために、ペストが再びその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日が来るであろうということを」と結んでいます。まるでコロナウイルスの感染拡大を予想しているかのようでカミュの洞察力に驚きました。

社会運動家の拷問死に迫る

西田信春―蘇る死

上杉朋史著　学習の友社　1650円

上杉朋史さんは、北星学園大学付属高校の社会科の教師として教壇に立ち2003年に退職。2007年から自らの先祖のゆかりの地である奈良十津川郷を訪ね、資料収集を始め『父祖たちの風景』(2013響文社)にまとめました。そこで出会ったのが岩見沢生まれ新十津川出身の西田信春でした。動機は、今の政治情勢が昭和初期の戦前体制に似ているという危機感でした。闘病生活をしながら本書を書き上げたひと月後に75歳で亡くなりました。

小林多喜二が虐殺されたのはよく知られていますが、西田信春はあまり知られていません。上杉さんと同僚で自身も社会科を教えた松元保昭さんは「忘れられていた無名の活動家西田信春を浮き彫りにし、ついに真実に向かう名もない若者に光を当てる『語り部』となった」と上杉さんの出版を喜びました。

権力によって闇に葬られた西田信春の虐殺の真実と、魅力あふれる人間像が蘇ります。

西田は幼少年期を北海道新十津川村ですごし、1927年に東京帝大を卒業。全日本鉄道従業員組合本部書記となり、共産党に入ります。「無産者新聞」の編集に携わり、32年に九州の共産党再建のため責任者として就くのですが、翌年検挙され、この年の2月11日福岡署で虐殺されました。多喜二虐殺(33年2月20日)の9日前でした。しかし、長く真実は隠蔽され57 年まで「消息不明」という扱いでした。西田は、当時3つの偽名を使っていて、検挙された時も黙秘を貫きました。

上杉さんは、西田と交流のあった石堂清倫(後の社会思想研究家)や中野重治(詩人)らが戦後、失踪の状況を調べた「西田信春書簡・追憶」を探し当てました。また作家で西田の秘書役だった牛島春子の未発表の手記などを発見。死の直前の経緯も明らかになりました。終章「甦る死」では拷問による傷痕が残る屍体鑑定書を徹底的に検証し、虐殺の真相を解明しました。鑑定した医師の証言を石堂が記しています。遺体となった人物について特高刑事が「あんまり白状しないから足を持って2階から階段を上から下、下から上へと、引きずり上げたり下げたりして、4，5回やったら死んじゃった」と話したと書いています。人としての尊厳を踏みにじり、虫けらのような扱いに怖ろしさを覚えました。評伝には東大時代の日記も引用。女子学生への憧れや、ボート部時代のエピソードなどのなかに、農村の貧困問題に思索を深めた様子も記しました。

松元さんが「供養のために専門家に読んでもらいたい」と特高警察などの研究で知られる、荻野富士夫小樽商科大学名誉教授に原稿を送りました。「西田のような若者が命を落とした戦争の時代を知る手がかりになる」と荻野さん自ら刊行委員会を設け、出版にこぎ着けました。民主主義が危機に瀕している今、是非読んでいただけたらと思います。

もう黙ってはいない

マスコミ・セクハラ白書

WiMN編著　文藝春秋　1760円

体験を伝えたのは30数人。財務事務次官によるテレビ朝日記者へのセクハラ事件をきっかけに作られた「メディアで働く女性ネットワーク」(WiMN)の編著です。

新聞、テレビ、雑誌などメディアで働く女性たちが、沈黙を破り、自ら性暴力を受けた当事者としての体験を語りました。メディア内部で起きている性暴力は常態化しており、女性記者たちの7割以上がセクハラ被害を受けているという。怒っていいんだと女性たちが立ち上がった意義はとても大きいと思います。数十年もの間、被害者の声はかき消され、加害者が罰せられることは稀でした。本書はそのような不条理で耐え難い実態を、内部から告発しています。性暴力は人権侵害であり、加害者(多くの場合は男性)は、犯罪者として裁かれるのは国際社会の常識ですが、この国ではそうではなかったことに驚きを覚えました。

第1章「私たちのこと」は、ピアカウンセリングを真似て互いにインタビューし合うピアインタビュー(第1部「聞く」)と、自らのことを綴ったエッセー(第2部「語る」)から成り、第2章は「コラムー社会時評」就活セクハラや医学部入試の女性差別、レイプ裁判で相次いだ無罪判決などについての記事を載せています。

TBS記者による性暴力を訴えた伊藤詩織さんが昨年、損害賠償を求めた裁判で勝訴したのは、#MeTooで広がった支援の輪も大きかったと思います。性被害者に希望の判決でした。

元フリーライターの池田鮎美さんの訴えが痛切です。「生きるとは何なのか。尊厳とは何なのか。暴力を受けている間、わたしの心は、殺されるその瞬間に流れるであろう自分の血の色を想像していた。一方で『抵抗しなかった子女の貞操ごときは守るに値しない』というフレーズが頭の中を回転してもいた。(略)今度こそ死ぬのだろうと思いながらも、生きたいと思った」と書きました。胸が苦しくなりました。告発された加害者は、会社の上司、同僚だけでなく、警察官、検察官、公務員(役人)、政治家、そして取材先の男性たち。つまり、職場の内でも外でも、記者としての仕事に関わるすべての場面で、彼女たちは日常的な性暴力の危険にさらされてきたのです。勇気ある告発をレイプした男性はしっかりと受け止めてほしい。

先日、アメリカの歌姫でグラミー賞を何度も受賞しているテイラー・スウィフトさんのドキュメンタリーをネットフリックスで観ました。性暴力には裁判で毅然として「許さない」という姿勢を見せ、勝利しました。その勇気に励まされました。日本は男女平等度121位とは、あまりにも恥ずかしいですね。

世界を動かす気候活動家

グレタ　たったひとりのストライキ

マレーナ・エルンマン，グレタ・トゥーンベリ他著　海と月社　1760円

スウェーデンの現在高校生のグレタ・トゥーンベリさんは、深刻化する気候変動の被害に政府が真剣に向き合うように求め、2018年にひとりで座り込みの抗議行動をはじめました。グレタさんの訴えは共感を呼び全世界に広がりました。

本書は　マレーナさんが夫のスヴァンテさん、娘（グレタさんと妹のベアタさん）とともに書いた家族の話です。

きっかけはグレタ（敬称略）が授業で観た、公害をテーマにした1本の映画でした。大きなショックを受けた彼女に異変が起こります。彼女は重度の摂食障害を患い、11歳でアスペルガー症候群であると診断されます。さらに妹にも異変が起きます。あらゆる病院にかかり、医師や、専門家、友人に相談した、家族の奮闘が素晴らしい。両親は子どもたちの尊厳を守り抜きます。両親とグレタは研究者に会い学びました。その後のグレタの行動は世界中に知れ渡りました。

グレタは主張します。直ちに二酸化炭素排出量を大幅に削減し、地球温暖化を2度未満に抑えなくてはならない。さもないと気候変動により世界は確実に崩壊に向かい、人類は生存の危機に陥る。そのためにも世界各国は対策を取り、企業は直ちに経済優先の産業政策をストップさせるべきであると。

人々は自分の家が焼け落ちようとすればパニックになるが、地球環境が焼け落ちようとしてもパニックにはならない。しかし自身の家の焼失と同じことが地球に起きている。その元凶は世界のごく一部の富裕層にのみ利益をもたらす経済優先政策にあること、そのために不利益を被るのは将来の若い世代であることなどの主張が彼女の口から明快に語られます。この環境問題が、格差、差別、分断といった社会の難題と地続きであることを明らかにします。

本書後半にはグレタのスピーチを掲載。「変えるのは私たちみんなです」と訴えます。

たいていの親は、子どもに普通に生きることを願います。マレーナは、「『みんなと違う』は素晴らしい」とグレタを応援します。素敵な親子です。

グレタの「人類に迫る気候変動」に向き合い、行動する勇気に、私も、環境に負荷をかけない暮らしをしなければと思いました。

７日間ブックカバーチャレンジに参加しました。

フェイスブックで石川県の水野スウさんからバトンを受け取りました。

１冊目「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」ブレイディみかこ著　新潮社

ブレイディさんの息子が通う中学校はさまざまな問題が毎日起こります。人種差別、貧困、ジェンダー。息子は悩みながらも難問と格闘して前向きに成長していく姿が等身大で描かれます。時々クスッとしながら引き込まれました。エンパシーって何？という教師の問いに息子は「自分で誰かの靴を履いてみること」と答えます。「他人の立場になって考える」そんな想像力ってすごく大事ですよね。「日本はどうなの？」と問いかけられたように思いました。

コロナ禍で、「自粛警察」という相互監視が進んでいます。「公園で子どもが遊んでいるよ」「居酒屋の電気がついている」。息苦しくなります。人がちょっと違うことをするとバッシングするのはやめませんか？（本は215号で紹介）

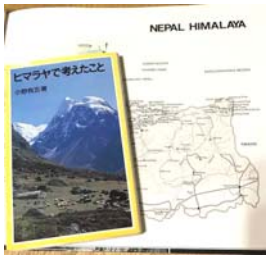
映画館が休館中で、心にぽっかり穴が空きました。「DVDがあるじゃない」と言う人もいますが、やっぱり映画はあのうす暗い空間で、見も知らない映画ファンと共有したいです。

２冊目は「キネマの神様」原田マハ著　文春文庫

ギャンブルと映画が無類に好きな父と娘の物語です。父ゴウの映画評が抜群に面白いのです。私も大好きな「ニュー・シネマ・パラダイス」を観た感想をゴウはこう記します。「映写技師と少年の友情物語。映画館のシーン。劇場を埋め尽くした村の人々が、笑ったり、泣いたり、怒ったり、恋をしたり観客のあいだに不思議な連帯感が生まれるのがわかる」「名画は、大輪の花火である、それを仕掛ける川辺がいま、失われつつあることを私は惜しむ」。今、まさにそんな状況ではないかと、ふと涙ぐみました。「名画座は昔ながらの村の鎮守」にも深く頷きました。

山田洋次監督が映画化し12月公開の予定。亡くなった志村けんさんに代わり沢田研二さんが主役を演じると発表されました。是非観たいです。

私と映画との出会いは高田馬場の小さな「名画座」での「ローマの休日」でした。王女アン（（オードリー・ヘップバーン）が城を飛び出し、自由を楽しみ、ちょっぴり切ない恋をして、成長する物語です。オードリーの清楚で可憐な魅力にすっかりファンになりました。オードリーの魅力は可憐さだけではなく、一本芯が通った毅然さではなかったでしょうか？本書にはたくさんの映画が登場します。もう一度観たいと思う映画がきっと見つかりますよ。写真ははるか昔に家族で観た「リバーランズ　スルー・イット」のパンフレットです。若いころ、ロバート・レッドフォードの大ファンでした。



３冊目は「ヒマラヤで考えたこと」1999年発行　小野有五著　岩波ジュニア文庫

小野有五さんは「地球環境の研究をするためにヒマラヤに来て、科学的にはいい成果を上げたのに、知らない間に自分たちの研究そのもので、ヒマラヤの村の環境を壊してしまった」ということに初めて気がつきます。

環境ということをまったく無視していたため村人が大事にしてきた森の木を伐らせてしまったことに気づいたのです。それで今後は、「環境を守るにはどうすべきか？」ということを第一に研究することにしたと語ります。私は小野さんの研究と市民活動を結んださまざまな取り組みに共感してきました。

小野さんは千歳川放水路問題では遊水地の研究をし、科学者として発言。放水路を中止に追い込みました。泊原発では活断層の研究をし、泊原発は廃炉にと市民運動の仲間と闘っています。その原点を知る、感動的な体験記です。平易な文章で、読みやすく、間違ったことにはNo！という勇気と、温かい人柄が伝わってきます。

4冊目は「チェルノブイリの祈り」スベトラーナ・アレクシエービッチ著　岩波書店

本文に入る前に石牟礼道子さんの「苦海浄土」に触れたいと思います。私の生き方を変えた本でした。学生時代に読みましたが、何度も読み直しました。石牟礼さんは2018年2月10日に亡くなり、水俣フォーラムが主催した東京有楽町ホールで開かれた「送る会」に参加し石牟礼さんを偲びました。

石牟礼さんは、言葉すら発することができなくなった患者たちの魂の声を聞き、聞き書き以上の真実をとらえています。その声は極限にあっても輝きを失わない人間の尊厳を伝えています。描かれているのは人間だけではありません。不知火の豊饒な自然が目に浮かぶようでした。近代化によって物質的な豊かさと引き換えに一部の地域が犠牲になり切り捨てられる構造も告発しています。今、事故後の福島で起きていることと同じではないかと思いました。

5年前に「チェルノブイリの祈り」でアレクシエービッチさんはノーベル文学賞を受賞しています。この本を読んだとき、「苦海浄土」で描かれた世界が原発事故ととても似ていると思いました。

1986年の巨大原発事故に遭遇した人々の悲しみと衝撃とは何か。本書は普通の人々が黙してきたことを、被災地での丹念な取材で聞き取ったドキュメントです。

アレクシエービッチはあくまでも被災者に寄り添い、ひたすら人々の気持ちを再現しようと努めました。被曝によって夫と、胎内にいた赤ちゃんを失った若妻の愛と悲しみ。「私、ついこの間までとっても幸せでした」で始まる、若い妻の証言に涙を禁じ得ません。夫は原発事故の半年後に現場に行き、被曝し発病し死に至りました。被曝の危険性を政府は全く知らせなかったのです。多くの人々が被曝し、口を閉ざしました。「ここには放射能なんかあるもんかね。チョウチョがとんでるし」と強制疎開地域の自宅に勝手に戻ってきた村民の声も聞き取ります。人々の息づかいが聞こえてくるような詩のような美しい文章です。

著者は国中を駆け回り、数百人の人たちに会いに行きました。そして、彼らの心を開き、その言葉を丁寧に書きとめたのです。多くの声が合わさって、一つの大きな時代の記録になりました。それが「国家の論理」をふりかざす権力に対するしなやかな抵抗でした。

「チェルノブイリ後、私たちが住んでいるのは別の世界です。前の世界はなくなりました。でも人はこのことを考えたがらない」「人々は忘れたがっています、もう過去のことだと自分を納得させて」そして「私は未来のことを書き記している」と結んでいます。まるで福島の事故を予言しているかのような文章に衝撃を受けました。歴史に埋もれるはずだった市井の人々の声がアレクシエービッチによって丁寧にすくいあげられ感銘を受けました。福島からこういう真実の声を集めた本が出ることを期待します。

5冊目です。「たいわけんぽうBook＋（ぷらす）」水野スウ著　　イラスト・編集・デザイン：mai works　発行元：紅茶の時間

私が発行する「銀河通信」は1988年7月が創刊です。水野スウさんは同じころ「いのみら通信」を発行されていました。自宅を開放して「紅茶の時間」を開いていました。新聞記事で知り、お手紙を出し交流が始まりました。スウさんも私もチェルノブイリの原発事故で「地球のいのちを守りたい」と何かしなければと模索していたころでした。私は反原発の学習会や集会に参加していました。1991年、チェルノブイリから5年目の春、「かざぐるまキルト3.326人展」があるという「いのみら通信」が届き、我が家も家族3人のキルトを手作りして郵送。金沢に家族を代表して出かけました。その時の銀河通信32号（写真）にその様子を「北は宗谷から、青森、東京、京都、広島、福山、金沢、珠州、熊本と全国から5歳から88歳のおばあちゃんまで参加しています。（略）つながらなかったキルトもみんな展示されました。会場の壁が埋め尽くされて、日本中のいのちを守りたいと願う人々の祈りがひしと伝わってジーンとしてしまいました。と書きました。そのときには全く気が付かなかったけれど不断の努力の12条するってこういうことかしら？と思いました。スウさんとはその時が初対面でした。以来30年来の友人です。

スウさんは「紅茶の時間」で培った人のお話を聞くのがとても上手です。否定しない。必ず、「あなたのこんなところが素敵だよ」と伝えます。スウさんはベアテ・シロタ・ゴードンさんの「1945年のクリスマス」を取り上げてました。私はこの本を読んで、ベアテさんのインタビューに臨みました。

2000年の12月に、民医連新聞の新年号のインタビュー記事を書いてほしいと東京から依頼があって、ドキドキしながら出かけました。当時、通信員として、北海道の病院内の話題をたくさん投稿していて、目に留まったようです。たくさんの質問を考えてインタビューに臨みました。ベアテさんは世界各国の憲法を読み、日本で見聞きした女性の姿に心痛めていました。「好きな人と結婚できないこと。家で子どもの世話をし食事を作る。夫の支配下に置かれ女性に権利がない」。24条の「男女平等」をベアテさんが記したものです。「女性が幸せにならなけれ

ば男性も幸せにならない」という思いに深く同感しました。ベアテさんは「日本憲法の生みの親は”歴史の英知”だ」と語りました。

「たいわけんぽうBook＋（ぷらす）」は、昨年第24回平和・協同ジャーナリスト基金・荒井なみ子賞を受賞しました。2015年に「わたしとあなたのけんぽうBOOK」を出版。今回はその第二弾です。スウさんが書いた「けんぽう」の本には、私たちの生活を支える大事なことが書いてあるのだと教えてくれました。人権と民主主義は当然だと思って生きてきました。先日ドキュメンタリー「ヤジと民主主義」を観ました。安倍首相が札幌で参議院選挙の応援演説をしているときに演説会場でヤジを飛ばした1人の男性が、多数の警察官によって排除されたのです。「増税反対」と声を上げた女性も同じように排除されました。年金問題に関するプラカードを掲げようとした年配の女性も、警察官によって安倍首相から遠ざけられ、掲げることはできなかったのです。言論の自由が奪われたことに、まるで戦前ではないかと怒りがこみあげました。

13条の個人の尊重や12条の不断の努力が明記されていることは知ってはいても、どんなに大事なことなのかを深く考えたことがなかったように思います。スウさんは平たく、憲法を自分ごとと思えたら、もっともっと生きやすい社会を私たち自身がつくることができると語ります。「たいわけんぽう」は簡単に答の出ない問いと対話しながら考える過程を綴っていて親近感がわきます。「平和憲法」と呼ばれる憲法を持ちながら、真逆の方へどんどん進んできたようにも思える私たち。そのことをどう考えますか？

軍隊を廃止した「コスタリカの軌跡」を見ての感想など小さな本に平和への思いが詰まっています。

6冊目です。「不思議なレストラン　心病む人たちとこの街でくらしたい　クッキングハウス物語」
松浦幸子著　教育資料出版会

心の病気になっても、自分らしく輝きたい。東京調布市のレストラン「クッキングハウス」は「不思議なレストラン」とも呼ばれています。本書が新聞で紹介されて早速読みました。以来、代表の松浦幸子さんとのおつきあいは20年ぐらいになります。すぐに賛同会員（その後会員）になりましたが、なかなかお目にかかる機会がありませんでした。

私も在職中、心病む患者さんと接する機会がありました。ほとんどの人が薬で管理され、地域で自分らしく生きる場はありませんでした。札幌に、こんな居場所があったらいいなと思いながらそんな場を実現させた松浦さんの行動力に目を見張りました。松浦さんは働きながら夜学で大学を卒業されてから、精神科のソーシャルワーカーになる学校に通います。その後、精神科の医療を目の当たりにして、心を病んだ人々が病院ではなく、地域で生き生きと暮らせる道はないだろうかと考えます。そのきっかけを作ってくれたのがけいこさんです。けいこさんとショッピングを一緒にしながら、松浦さんが「街のなかに、小さい場でいいから、いつでも開いていて、なんでも話せて気持ちが楽になって、いつでも出かけていけるような居場所がほしいね」と話しかけました。目を輝かせて「そんな場所を作って！！松浦さん」その数年後にスタートさせたのがクッキングハウスでした。隔月で送られてくる通信がいつも温かく、楽しみにしいます。

2017年4月、なんと私の「銀河通信」200号を祝う会に松浦さんが出席。松浦さんは、笠木徹さん作詞作曲の「君は君の主人公だから」をお祝いに歌ってくださったのです。
「君のやさしさは、君のものだから　とりかこむ世界にゆだねてはいけない　昨日を今日につなげるために　今日を明日に手わたすために」まるで私の人生を歌ってくれているかのようで、涙があふれました。同じ年の12月にクッキングハウス30周年を祝う会に、私もお祝いの気持ちを伝えたくて調布に行ってきました。会場は、地元はもちろん全国各地からの支援者もつめかけ500人でいっぱいになりました。クッキングハウスにも立ち寄り、スタッフと共に当事者の方たちが、生き生きと働く姿をみて感動しました。丁寧に作られた料理がおいしかったです。

朝日新聞「声」欄にクッキングハウスに通う方が実名で投稿されました。「生き生きと働く私たちを、是非その目で見にきてほしい」
コロナ禍で「クッキングハウス」は営業しているのかしら？「無事に乗り切ってね」と応援しています。

最終の7冊目です。「アンネの日記」
アンネ・フランク著　深町眞理子訳　文藝春秋社

朝日夕刊に興味深い記事がありました。ドイツでは人権を蹂躙したナチズムへの反省が戦後の土台になりましたが、中東からの難民を受け入れた現政権を批判する新興右翼が勢いづいていて、危機感を持ったドイツのフランクフルト近郊の高校では、「抵抗」を学んでいるという記事。教師は「民主主義は決して当たりまえではなく、守るために日々闘わねばならない。そのメッセージを広めることが私たちの使命だ」と語っています。

日本では朝鮮人の強制連行はなかったとか慰安婦問題にも誠実に向き合わない現政権に憤りを覚えます。そんななかで、きちんと学ぼうという学び舎の「ともに学ぶ人間の歴史」を採用する中学校に希望を見ました。

私がアンネ・フランクの「アンネの日記」を読んだのは中学2年の時です。私は他の街から転校したばかりで、友人もいなくて本ばかり読んでいた頃でした。

アンネはアムステルダムの隠れ家で、家族や同居人を鋭い観察眼で表現しました。同時にユーモアもあり不自由な生活の中でもしっかりと世の中を見ていました。快活で誰にでも愛されたアンネですが、いっぽうで、誰にもわかってもらえない繊細な気持ちを持っていて、そこに共感したのかも知れません。クラスメートに「この本読んでみて」と次々と貸した日を思い出します。「このことは多くの友人に知ってもらいたい」と行動した日が忘れられません。

なぜ、アンネが過酷な迫害に遇わねばならなかったのだろう？いつかアウシュヴィッツに行って確かめたい、と思っていたのが2014年7月の旅につながりました。ハンセン病回復者と北海道を結ぶ会の仲間と私の5人でアウシュヴィッツとプラハを訪ねました。唯一の、日本人アウシュヴィッツ公式ガイド中谷剛さんの本「アウシュヴィッツ博物館案内」を読んで出かけました。中谷さんが出会ったポーランド人やユダヤ民（ユダヤ人という人種・民族はいないので）を紹介しながら、ポーランドの複雑な歴史に触れ、博物館の歴史やここを訪れる様々な国の人々の向き合い方について語ります。後半では多くの写真、地図、図面などを併用し実際に博物館の中を歩くように案内。実際に現場をみるときに、とても役立ちました。私たちも中谷さんにガイドしていただきました。

その体験記を書くと長くなりますので割愛します。（銀河通信184号に掲載。北海道新聞にさっぽろ自由学校「遊」で私が語った報告が記事になりました）

アンネは隠れ家生活を2年近く送り、密告により、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所に送られ、その後ドイツの収容所で1945年3月、16歳まであともう少しでチフスで亡くなりました。ビルケナウ収容所の不衛生な環境と、人間としての尊厳を奪うナチスの蛮行が命を縮めました。

アンネは、作家かジャーナリストになりたいと日記に記しました。1944年5月3日の日記には「いったい全体、戦争がなにになるのだろう。なぜ人間はお互い仲良く暮らせないのだろう。いったいどうして毎日何百万という戦費を費やしながら、医療施設とか、芸術家とか、貧しい人たちのために使うお金がぜんぜんないなどということが起こるのでしょう。どうして一方には飢え死にしなくちゃならない人たちがいるのでしょう。いったいどうして、人間はこんなにも愚かなのでしょう」と書きました。貧しい人や芸術家への支援が少ないのは今の日本と同じですね。

私も高校時代、新聞局に入ったのは「アンネの日記」の影響だったし、「銀河通信」もアンネの社会に開かれた鋭い批判精神に少しでも近づきたいと思ったからでした。アンネが生きていたら、今の世相をきっと痛烈に批判したに違いありません。

アウシュヴィッツの旅の後で、オードリー・ヘップバーンがアンネと同じ年で、同じころオランダで母を手伝って、ドイツ占領軍に対するレジスタンスに加わっていたことを知りました。靴の中にメモをしのばせてレジスタンスの連絡係を務めたのです。後日、オードリーは「アンネは私自身でもあった」と語りました。「ローマの休日」に込められた平和へのメッセージに改めて感動しました。「ともに学ぶ人間の歴史」に記されています。

Cinema Graffiti　〈私の映画評〉　シネマグラフィティ

SAMAのための記録が世界中に届いた
『娘は戦場で生まれた』

樋口　みな子

札幌映画サークル会報シネアスト２０２０年６月号掲載

新型コロナウィルスの感染が世界中に広がっています。3月23日に国連のアントニオ・グテレス事務総長はコロナウィルスのパンデミック（世界的な大流行）から紛争地域で、医療体制が整わない脆弱な市民を守るため、「全世界での即時停戦」を呼びかけました。10年にわたり続く内戦で疲弊しているシリアでも感染者が確認されました。

私は江別から電車に乗るリスクが怖くて、日中の映画館が混んでない時間帯で鑑賞しています。ぎりぎり間に合ったのが、ドキュメンタリー『娘は戦場で生まれた』でした。

映画の原題は『FOR SAMA（サマのために）』。市民ジャーナリストであり、活動家でもあるシリア人女性のワアド・アルカティーブが、ビデオカメラを手に、戦火の日々で起きたことを5年に渡って克明に記録しました。都市は破壊され、ハムザの病院は街で最後の医療機関となります。

サマ（アラビア語で空の意味）と名付けた娘の母として、一人のシリア市民として、家族の日常や、夫である医師、ハムザ・アルカティーブらの内戦で傷ついた人々への必死な医療活動、戦火に包まれたアレッポでの地獄のような日々を映し出し、世界に問いかけます。

病院の一室で愛らしいサマの大きな瞳が、空爆の意味も知らずに、泣きもせずに不思議そうに聞く姿に胸を突かれました。ワアドは、サマに聞かせるように、母の思いを伝えるように語り、撮影は一時も休むことはありません。戦場の日常を描きながら、戦火を生きる女性の視点で描かれています。

病院に負傷した妊婦が運ばれ、帝王切開で子どもを取り出す場面は忘れられません。取り出したときにはすでに心臓が動いておらず、医師たちが心臓マッサージや刺激を与えて蘇生させようとします。逆さにしたり、マッサージしたり。私も帝王切開で子どもを生んだ経験があったので、その時を思い出しながら祈るような思いで見つめました。「ああ、だめかも」と思ったら、おぎゃーと泣き始めたときには涙がこぼれました。母親も助かりました。まさに奇跡です！命の尊厳を見事に描写していました。

一番衝撃的だったのはアレッポの川べりで100体

以上の処刑された遺体が引き上げられている映像です。ニュースになったでしょうか？知られていない真実です。政府軍に拉致された人々が処刑されて、川に投げ捨てられた事件です。自分の国でありながら、アサド政権に批判的であるというだけで、罪もない人々を平然と殺したことに慄然としました。空爆で弟を失ってぼうぜんとする少年と、青いビニールに包まれた息子の遺体を抱いて一人で運ぶ母親も映し出されます。「あの少年にあなた（サマ）を重ねて、母親に私を重ねた」と、ワアドはつぶやくのです。

2年前に観た、シリア北部のラッカの惨状を国際社会に訴えたドキュメンタリー『ラッカは静かに虐殺されている』を思い出していました。市民記者のひとりが語った「まともな死に方をしたい」という言葉が忘れられません。市民記者たちの真実を伝えなければという覚悟がひしと伝わってきて、私にできることは何だろうと考えさせられました。

「娘は」の映像は、ただひたすら自らの周りに起きた事象をカメラで捉えていくだけです。日常の全てが「戦場」だということが、映画の持つ意味だと思います。しかも悲惨さだけではなく、普通の市民の日常、子どもたちの笑顔が写しだされます。幸せあふれたハムザとの仲間内での結婚式や、出産の様子。結婚して新居で植物を育てるハムザの一面も。

ワアドは、学生時代に独学で撮影方法を学び、アサド政権への抗議活動が始まった頃から「市民ジャーナリスト」として撮影を始め、ネットで発信してきました。SNS等でリアルタイムに次々とシェアされて、全世界に拡散。「私たちは世界に叫ぶ　助けて」「数千万人が私の投稿を見ている　″視聴回数6800万回″　なのに誰も政権を止めない」とワアドが嘆きます。この言葉は、シリアで今も続く虐殺の内と外を象徴しています。アレッポの街は壊滅状態になり、家を捨てて緊迫の脱出。これが戦場か！と体感する。愛と希望の象徴であるサマの存在がどれほど大きかったか！　市街地を俯瞰するカメラにはワアドの不屈の魂が宿っているかのようでした。

昨年のカンヌ国際映画祭で最優秀ドキュメンタリー賞を受賞し、ワアドらは「病院への空爆を止めろ」と書かれた紙を掲げました。その様子はネットで見ることができます。その後も他の映画祭会場でも、同じメッセージで訴え続けたそうです。内戦で命の危険に曝されている人々がいることを多くの人に知ってもらいたい。戦争は悪です。軍事費が増大し続けている日本も同じ間違いを犯すのではないかと危惧しています。この映画がシリアの現実に関心を寄せるきっかけになればと思います。

前面には出てきませんが、イギリスのエドワード・ワッツ監督との共同作品です。サマをテーマに描くアイデアは二人での編集を通して決まったそうです。今は家族でイギリスに暮らすワアド一家が、どんな生活をしているのか気になりました。「アレッポを離れたサマは最初の半年は「夜に突然起きだし、泣かずに、叫び声をあげる時があった。時々、サマが別の世界に行ってしまったような感覚にもなったわ。多くの医師やセラピストと連絡を取って、話を聞いたり、アドバイスも受けたりしたわ。8か月後には、ようやくサマは普段の状態を取り戻し、今ではすっかり良くなった」とワアドは語っています。良かったなぁと安堵しました。

全国の映画館が休館してすでに1か月を超えました。（この文章は4月12日、全国のコロナ感染拡大の日に記す）

世界でいちばん貧しい大統領
愛と闘争の男、ホセ・ムヒカ

エミール・クストリッツァ監督

緊急事態宣言（4月8日）が出されて3週間。安倍首相はこの機に及んでも私たち国民に向かっての発言がプロンプターを見ながら行われ、自分の言葉で訴えませんでした。

ドイツのメルケル首相は「民主主義国家だから政治的決定は透明性を持ち、詳しく説明されねばなりません」と前置きし、外出の禁止やイベントの中止など、さまざまな制限措置についてこう語りました。「私は皆さんに保証したい。自由に旅行し移動する権利を得るのがとても大変だった私のような人間に言わせれば、こうした制限は絶対的な緊急時にしか正当化されません。民主主義社会では決して軽々しく発動されてはならず、暫定的でないといけない。しかし今は、多くの命を救うために欠かせないのです。誰も犠牲になってはいけない。誰もが大切にされるべきであり、私たちは一体となって努力することが必要なのです」。私はこの発言をネットで読み感動しました。こんな首相がいるドイツ国民は幸せだと思いました。とても小さな国ウルグアイのホセ・ムヒカもメルケル首相に劣らず素晴らしい大統領でした。

映画はホセ・ムヒカのドキュメンタリーです。収入の大半を貧しい人々のために寄付し、職務の合間にはトラクターに乗って農業に勤しみ、まん丸な体と優しい瞳。風変わりだけど自然体で大統領という重責を担った、南米ウルグアイの第40代大統領ホセ・ムヒカ（愛称ペペ）。　ウルグアイは人口345万人。人より牛が多い小さな国です。

2012年のリオデジャネイロでの地球サミットでのスピーチで、ムヒカさんは環境危機を引き起こしている真の原因は、現在まで発展に発展を重ねてきた消費至上主義なのだと厳しく指摘。私たちが真にもとめる幸せとは何なのでしょうと、問いかけました。経済発展は人類の幸福に結びついておらず、むしろ経済格差が広がりつづけていると発言しました。

ユーゴスラビア出身のエミール・クストリッツァ監督は、自ら中古の自家用車を運転して政務に就くムヒカを、「世界でただ1人腐敗していない政治家

だ」と評価。2014年からムヒカの撮影を開始し、大統領としての任期を満了する感動の瞬間までを、カメラに収めました。

ムヒカとクストリッツァがゆったりとお茶を飲むシーンから始まります。すると一転して70年代、軍事政権下にあったウルグアイで、左翼ゲリラとして権力と戦い、13年間の獄中生活を送った半生が浮かび上がってきます。妻のルシアさんは当時から深い信頼で結ばれた同志でした。愛するパートナーとは長く離れ離れにになりますが、信頼は揺るがなかったのです。ルシアさんの若き日は美しく聡明な女性であったことが伝わってきます。住民は「ムヒカはいつも私たちの味方よ。貧しい人の身になって考えてくれる」と親しみをこめて語りました。

ムヒカの国民に寄り添った現役時代の仕事ぶり、引退後の生活の映像とともに「政治の世界で探すべきは大きな心と小さな財布の人物です」と自身の哲学を語ります。リオデジャネイロでのスピーチをそのまま実践されている姿に感動しました。酒場で、ルシアさんと寄り添いながら、歌を口ずさむシーンがあります。「タンゴは人生で喪失を知る者のための音楽だ」と語ります。ムヒカは権力と闘い、多くの人々の命を失った日を思い出していたのかもしれません。子どもへの慈愛にあふれるまなざしも忘れません。ムヒカ夫妻には子どもがいませんでした。

日本もコロナ禍で弱者が一番大変な思いをしています。安倍首相は現場を知らなさすぎます。そういうなかで仕事を失って食べることにも困っている人たちに、無料でお弁当を届けている人々がいます。レストランの店主たちです。温かい気持ちに胸がいっぱいになりました。

Cinema Graffiti　〈私の映画評〉　シネマグラフィティ

移民の子どもたちの未来を問う

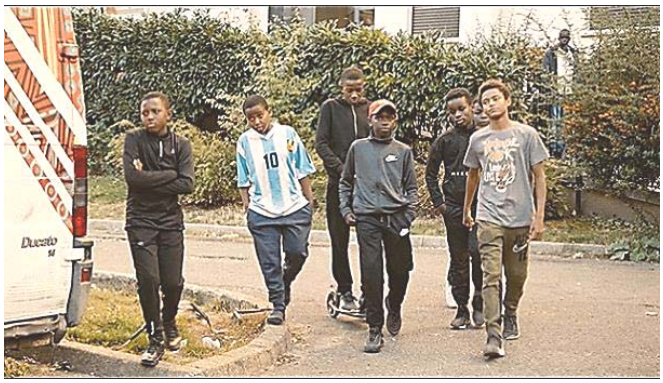
『レ・ミゼラブル』

樋口　みな子

札幌映画サークル会報シネアスト２０２０年５月号掲載

フランスのパリ郊外を舞台にし、少年たちが、貧困や理不尽な差別や抑圧に抵抗し、エネルギーを爆発させます。本作はアフリカ・マリから移住した両親のもと、モンフェルメイユの中でも低所得者用のボスケ団地で育ち、現在もこの土地に暮らすラジ・リ監督・脚本で、これが初の長編劇映画です。自身がその街で体験してきたことを映画に投影させ、昨年のカンヌ映画祭では『パラサイト』と最高賞を競い合い、アカデミー賞でもポン・ジュノ監督と並んで世界中から注目されました。フランスでは観客動員200万人を突破する大ヒットを記録中です。その熱量に圧倒されました。マクロン大統領も観て絶賛したそうです。

フランスといえば、おしゃれで、個人を大事にする国というイメージがありましたが、パリからわずか1時間の場所に、まるで、アフリカの街かと見まがう風景に



驚かされました。

サッカーのワールドカップ優勝に沸く2018年のパリから始まります。モンフェルメイユの住民たちは大人も子どもも、競技場のお祭り騒ぎに飛び込んでいきます。サッカー最高！　フランス万歳！そこに不穏な音楽がかぶさります。浮かれた熱狂が過ぎ去ると問題だらけの日常が待っていました。

映画の舞台はヴィクトル・ユゴーの名作「レ・ミゼラブル」の舞台でもあるモンフェルメイユ。アフリカなど30にも及ぶ国々からの移民や低所得者が住み宗教の違いや、麻薬密売人、ロマなど、さまざまな利害が絡んで犯罪が絶えない地域です。アーティスト集団クルトラジメの元メンバーとして、内側からの現実を撮影し続けてきたリ監督が映すのは悲惨な現実に生きる悲惨な人たちではありません。過酷な現実の中で生き抜く、多様な人たちの生き生きとした姿です。ドローンやネット動画といった現代らしいアイテムも展開に生かされています。

平穏な地方から転勤でこの地の警察の犯罪防止班に配属された主人公、ステファンは、同僚ふたりと共にパトロールを始める中、白人警察官クリスの横暴な取り調べにショックを受けます。クリスはバス停でタバコを吸う少女に目を留め、足元に落ちていたタバコを拾い少女に煙を吹きかけ、無遠慮に身体検査を始めようとするのです。「令状は？」と反論されても、クリスの激しい追及が止まることはなく、その様子を撮影しようとした少女の友人のスマホを取り上げ叩き壊してしまいます。いくら何でもやり過ぎ！人権侵害ですよ。言葉を失うステファンは、しだいに、地域の状況と警察官との関係を知っていきます。ただ路上にいるだけで、職務質問される恐怖にさらされる移民2世、3世の子どもたち。でもそんな日常であっても、仲間と楽しみを見つける豊かな詩情もありました。

そんなとき、少年イッサがいたずらでサーカス団のライオンの子どもを盗んだことがもとで、街は一触即発の事態となるのです。逃走するイッサにグワダの発砲したゴム弾が当たり、重傷を負います。ある少年が問題になる光景をドローンを飛ばしてカメラに収めていたことを知り、クリスは証拠のもみ消しに躍起になり、「俺が法律だ！」と暴言を吐きます。ステファンはイッサを助けようと奔走します。

警察官や、地域の顔役などは別として、モンフェルメイユに住む少年、少女が起用されました。実際にあの地域に育っている彼らにとっては日常茶飯

事のことで、自然に演じたと言います。イッサを演じた少年の迫真の演技に息を呑みました。リ監督の息子も重要な役で出演しています。まるで少年時代の監督がそこにいるようでした。子どもたちの差別者たちへの怒りの行動が想像を超えていて、とてつもなくパワフル。ラストまでの30分に釘付けになりました。

街の現実を社会に訴える、リ監督の切実な思いが込められていて、心が震えました。途方に暮れる女子高生、追い詰められた少年らのすごいリアルな描写に、私はこの地に生きる彼らの、苦しみや悲しさや怒りを共有したかのように思いました。

ハンディ撮影を多用し、まるでドキュメンタリーのようでもあり、私たちの未来が透けて見えるようでした。

「友よ　よく覚えておけ　悪い草も　悪い人間もない　育てる者が　悪いだけだ」のユゴーの言葉が映し出されます。育てる者？それは政治か社会か、愛かと問います。

すべての子どもたちが、未来を夢見ることができる社会であってほしいと願わずにはいられませんでした。

イーディ、８３歳　はじめての山登り

サイモン・ハンター脚本・監督

30年間も夫の介護に明け暮れてきたイーディはある日、夫の死を迎えます。離れて暮らす娘からは老人施設を勧められる始末。ずっと、夫の強圧的な支配で、自分らしく生きられなかったなか、若い日に父から受け取った絵葉書を見つけます。「一緒にスイルベン山に登ろう」

住み慣れたロンドンから、夜行列車に乗ってスコットランドの山に向かいます。偶然出会った地元の登山用品店の青年、ジョニーと知り合い、テントの張り方や食事の作り方、地図の見方などを学びます。丁寧な指導でイーディはたった一人でスイルベン山頂上を目指します。頑固で、ジョニーと何度もぶつかりますが、なんでも吸収するたくましさとチャーミングさも合わせ持っていて、ジョニーは心配しながらも、ひとり登山に送り出すのです。

「子どもの頃はやんちゃだったのよ」と語る瞳は輝いていました。案の定、途中で豪雨に遭い、何かあった時には「必ず携帯に電話して」という約束も果たせません。イーディは薪が燃やされ温かい暖炉のある小屋にたどり着きます。安心し眠っていると、猟師の住人が戻ってきて、温かい食事を用意してもらい命拾いするのです。再び登山を開始するイーディ。そこにジョニーが追いつき、イーディをサポート。見事に山頂に到達します。

私もスコットランドの大自然の美しさ、雄大さに心洗われ、イーディと同行しながら頂上に達した気持ちになりました。

撮影当時、イーデイを演じたシーラ・ハンコック自身も83歳だったそうです。実際にスイルベン山でトレーニングを積んだことも素晴らしいですね。

野生の呼び声

クリス・サンダース監督

私は探検ものが大好きです。ジャック・ロンドンが1903年に発表した不朽の名作小説。ゴールドラッシュに沸く19世紀末の米アラスカを舞台に、数奇な運命のもと極寒の地で犬ぞりチームのリーダー犬となった元飼い犬のバックが、様々な経験を経て内に眠っていた野性に目覚めていくさまを描く物語です。夫が学生時代に英文で読んで「面白かった」というので、私も映画を観てから読みました。

本作は、新たに制作。地上最後の秘境アラスカで地図にない土地を目指してひとり旅する男ソーントンは、犬ぞりの先導犬としてアラスカにやってきた犬のバックと出会います。やがてソーントンとバックのあいだに友情が生まれ、かけがえのない相棒となっていきます。主人公ソーントンをハリソン・フォードが演じました。監督はディズニー出身で『リロ・アンド・スティッチ』『ヒックとドラゴン』などのヒット作を監督したクリス・サンダースです。

ソーントンがユーコンにやってきたのは、息子と冒険することをずっと夢見ていたからでした。息子は父の話す未知の世界ににあこがれながら早くに亡くなり、妻との関係も難しくなり家を出て、山小屋で暮らします。バックと出会ったことで、やり残した息子との冒険に再び挑むことになります。雪と氷に閉ざされた地での過酷な旅を続けるなかで、ソーントンとバックは固い絆で結ばれていきます。ユーコン川の激流、雪崩や凶暴なクマとの戦い、バックとオオカミとの遭遇。容赦なく襲い来る大自然の猛威に彼らは互いを信じて立ち向かいます。

主役犬バックの動きは「猿の惑星」シリーズで知られるモーションキャプチャー俳優のテリー・ノタリーが演じ、それを後からCGに置き換えているという。実写とアニメの線引きを超えたこのハイブリッドな効果がとにかく素晴らしく、生まれて初めて氷の大地を踏む時のおっかなびっくりの表情や、無邪気に跳ね回る姿など、バックの一挙手一投足には言葉を超えた愛おしさがあふれていました。私はそんなことも知らず、まるで人間みたいと思いながら見ていたのです。ユーコン河の美しさと厳しい自然に引き込まれ、人と犬の友情と信頼に心が温まりました。

購読料と寄付をありがとうございます
（敬称略）３月１３日～５月２１日

柴崎　徹　岡崎幸彦　福島　清　小林　汎　松浦幸子　細田伸昭　花崎皋平　川原茂雄　高橋儁　吉根由起子　大関裕美子　吉田雅子　湯本まさえ　齋藤眞依子　則末尚大　中村秀子　石井たか子　伊藤誠一　津田孝　佐々木睦子　仲俣善雄　佐藤正人　竹田とし子　水野隆夫　荒谷雅子　合田美津子　吉田まゆみ・赤石としあき　山口力三　川原麻代　豊村みどり　三浦恵美子　阿部一子　合計86,000円は印刷と送料に使わせていただきます。吉井利明　著書　小野有五　書籍　高橋明子　著書　花崎皋平　著書　多数の著書や書籍ありがとうございます。